

近世京都における旅人の観光行動

—旅日記と小型案内記との比較をとおして—

谷 崎 友 紀 *

I. はじめに

近世には、伊勢参詣や本山参りなどの旅が流行し、京都にも多くの旅人が訪れていた。旅人のためにさまざまな案内記が出版され、その中には持ち歩きができるように小型化され、モデルコースが示されたものもあった。それらの案内記は、特定の場所を「名所」として認識させるツールとして、今日の観光ガイドブックのような役割を果たしていたと考えられる。

これまで京都の名所研究は、案内記を中心に進められてきたといえる。たとえば矢守や山近は、案内記の分類という書誌学的な研究を行った¹⁾。山近は、そこで小型案内記と分類した案内記の実用性の検討も行っている。また菅井は、巡覧コースが示されており、洛中と洛外の区分を読みとることのできる案内記を対象とし、巡覧コースの特徴や実用性、当時の洛中洛外の認識についての検討を行った²⁾。これらの案内記の中には小型案内記も含まれているが、現実の巡覧を想定しているはずの小型案内記であっても、必ずしもすべてが現実に即しているわけではないとされている。

また塚本は、GISを用いて近世京都の案内記を網羅的に分析し、名所の掲載が変化する様子を明らかにした³⁾。ここでは、モデルコースが示された案内記の場合にコースから遠い名所は省略されてしまうなど、名所の掲載は案内記の体裁や性格に影響を受けることが明らかにされている。これらの既往研究では、名所案内記は東山を掲載の中心としており、この地域が名所見物の中心となっていたという見解が示されている。さらに長谷川は、『都名所図会』などから京都の名所は歌枕由来のものが多く、京都における名所観の根底には歌枕があることを明らかにしている⁴⁾。

一方、旅日記を対象としたものとしては、高橋⁵⁾や廣瀬⁶⁾の研究があげられる。高橋は東北地方から伊勢・上方方面への旅日記を、また廣瀬は東国の庶民による旅日記を分析対象としており、両者とも東山が名所見物の中心となっていたことを指摘している。さらに廣瀬は、案内記は土産物が今後の旅行のために購入され、参観経路の決定には影響しなかったという見解も示している。

このような案内記の利用に関しては、斎藤⁷⁾や金⁸⁾が検討を行っている。金は、案内記と旅日記の記述の類似性に着目し、旅日記の作

* 立命館大学大学院文学研究科・院生

キーワード：京都、旅日記、小型案内記、名所、観光行動

Key words: Kyoto, Travel Writing, Compact Guidebooks, Notable Place, Traveler Behavior

者が旅日記を増補・校正する際に案内記を参照していた可能性があることを指摘した。

さらに中島は、案内記や旅日記が出現する以前の京都見物に着目し、仮名草子を用いて検討を行った⁹⁾。仮名草子に登場する名所やコースから、名所案内記類が出版される以前に仮名草子が京都見物のモデルコースとして活用された可能性が指摘されている。

これらの既往研究の課題としてあげられるのが、旅日記と比較して案内記研究の比重が大きい点と、いずれも案内記と旅日記をそれぞれ個別に検討したものであり、両者を比較検討しているものも記述の類似性を指摘するにとどまっている点である。

案内記は当時の人々の名所に対するスタンダードな認識を反映したものといえるが、案内記のみから人々の観光行動を検討するには限界がある。また、旅日記から旅人の観光行動を検討したものも、主な分析対象となる旅日記の年代や作者の身分に偏りがみられ、現在明らかにされている近世京都の観光行動は非常に限定されたものであり、近世をとおした検討が必要といえる。旅日記には実際の旅人の行動が記されており、その中には名所で宝物を見物したり、茶屋で土地の名物を食べたりといった娯楽的な行動も多数みられる。

本研究ではこのような旅人の行動を観光行動として定義し、多くの人々が観光を行った近世の京都を事例に、当時の観光の実態を明らかにする。

II. 時代背景と研究方法

1. 近世京都への旅

18世紀に入ると、東海道五十三次に代表

される諸街道の宿泊設備の充実、金・銀貨及び為替の流通などの経済的变化、駕籠などの乗物や荷物の輸送組織の発達、遊女などの遊楽施設の普及、盗賊の減少など交通環境の好転によって、旅は多くの人々の間に広まった。各藩では、物見遊山や他国旅行を抑制・禁止する動きもみられたが、人々は医療行為である湯治や宗教行為である社寺参詣を名目とし、旅に出るようになった¹⁰⁾。さらに、十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』、仮名垣魯文の『滑稽富士詣』などの滑稽紀行文学の流行も、人々の旅への欲求に拍車をかけた¹¹⁾。

このように、近世には人々が信仰以外に旅自体を享受するために出かけるようになり、観光的・遊楽的要素の強い旅の形態が発達し、旅のレクリエーション化が進んだ。

京都には各宗派の本山が集中していたため、京都は地方末寺の檀家たちが宗祖や遺跡を訪ねる目的地となり、多くの旅人が京都を訪れるようになった。京都の各寺はそれぞれの霊験にちなんで開帳や縁日の修法を行い、それを年中行事として定着させて参詣客を集めた。三条大橋周辺には多くの宿屋が軒を連ね、宿屋では旅人を宿泊させるだけでなく、京都の地理・遊覧に不案内な旅人のために案内人をおき、効率的な京都の観光案内を行った¹²⁾。

その他にも、現在のガイドブックにあたる案内記がさまざまな形態で出版された。初期のものとしては、明暦4(1658)年に出版された文学的な色が濃いとされる中川喜雲編の『京童』、地誌的要素を兼ね備えた浅井了意による『京雀』(1665)や、節用集的地誌と位置付けられる水雲堂狐松子による『京羽二重』(1685)などがあげられる。寺社の縁起や名所歌を中心とし、名所記の要素が強く

表れたのは、山本泰順による『洛陽名所集』(1658)である¹³⁾。そして18世紀に入ったのち、その流れを汲んだより実用的な案内記として小型案内記が登場する。また、秋里籬島の文章と竹原春朝斎の挿絵による『都名所図会』(1780)が出され、その後も名所図会シリーズとして複数の案内記が出版されるなど人気を誇った。このように、近世をと

してさまざまな種類の案内記が断続的に出版され続けることから、いかに当時の旅人らにとって京都が魅力的な場所であったかが読み取れる。

2. 対象とする史料と分析手順

分析対象となる小型案内記は、山近¹⁴⁾によって小型案内記と分類されたものの中から、同一の内容であるものを除外した7点で

第1表 分析対象の小型案内記

書名	出版年	編著者	版元	形式	備考
京城勝覧	宝永3年 1706	貝原益軒	小川多左衛門・永田調兵衛・ 著屋宗八・平野屋茂兵衛 辻勘重郎 吉野屋為八	日割、17日＋ 洛中＋拾遺	現存は享保6年(1721)。 天明4年(1784)再版。 宝暦5年(1755)再版。 享保15年(1730)、文政 13年(1830)再版。
京内まゐり 都名所車	宝永5年 1708 正徳4年 1714			日割、4日＋神社 羅列	
都名所道案内 京案内道しるべ 京都順覧記 京名所独案内	安永9年 1780 文政12年 1829 天保2年 1831 天保12年 1841	君修 池田東籬亭 池田東籬亭 池田東籬亭	正本屋吉兵衛 丸屋善兵衛 竹原好兵衛 正本屋吉兵衛	方角別、6区分 日割、6日 日割、6日 方角別、3区分	

第2表 分析対象の旅日記

番号	史料名	和歴	西暦	作者	職業・身分
1	所歴日記	寛文4年	1665	石出常軒	国学者・歌人
2	千種日記	天和3年	1683	未詳	儒者
3	日記六号	元禄4年	1691	貝原益軒	黒田藩儒医
4	佐藤善兵衛街道中記	元禄6年	1693	佐藤善兵衛	庄屋
5	東遊草	宝永元年	1704	谷重遠	土佐藩士・儒者
6	京都旅日記	正徳3年	1713	未詳	吉田藩士
7	伊勢参宮記	寛延2年	1749	小野甚平	下級旗本の隠居
8	遊洛記	安永9年	1780	頼梅颯	歌人
9	江漢西遊日記	寛政元年	1789	司馬江漢	画家
10	春埜道久佐	寛政4年	1792	山梨志賀子	歌人
11	思出草	寛政5年	1793	津村淙庵	学者
12	但州浴泉記	寛政12年	1800	伯邦	尾張藩士
13	伊勢参宮旅日記	文政6年	1823	未詳	農民
14	たびまくら	天保10年	1839	木内啓胤	武士
15	西国道中日記帳	天保12年	1841	未詳	農民
16	参宮一件諸控	天保15年	1844	未詳	農民
17	綺語文草	嘉永3年	1850	西沢一鳳軒	脚本・随筆家
18	西遊草	安政2年	1855	清河八郎	志士
19	在阪記事	安政4年	1857	栗原博洸	医師
20	道中日記手控書	安政6年	1859	未詳	農民
21	都紀行	元治元年	1864	萩原貞宅	幕臣
22	征西日記	元治元年	1864	伊庭八郎	幕臣(奥詰)

ある（第1表）。『京城勝覧』に関しては、現存している最古の刊本は天明4（1784）年出版のものであるが、本研究では金¹⁵⁾による成果に基づき、『京城勝覧』の出版年を序文が書かれた宝永3（1709）年とする。

もうひとつ対象となるのが、旅人が自身の旅の記録を記した旅日記である。近世には多くの旅人が旅日記を書き残している。旅をする際の心得を記した『旅行用心集』（1810）には、「道中にて日記認方之事」という項がある。ここには、「道中にて名所、旧跡を尋、風景の能所、又は珍敷物等見聞たるならば、何月何日何所にて何を見ると、有のまゝに書付もし、詩哥連俳の句、心にうかミたらバ、連続せずとも其趣を日記にしるし置へし。」¹⁶⁾とあり、旅をする際には旅の記録を記すことが推奨されていたことがわかる。

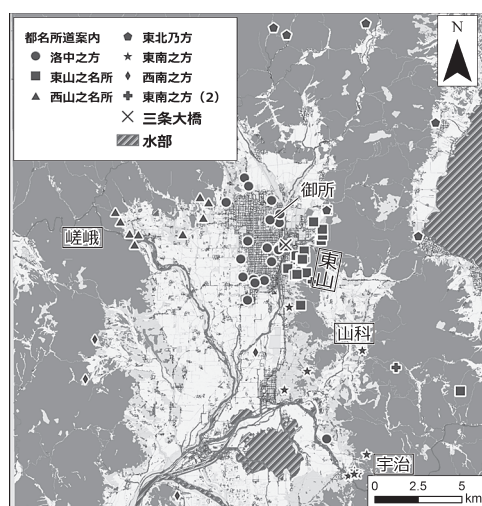
分析対象とする旅日記については、①2日以上以上の観光行動、②名所に関する記述が地名の羅列にとどまらない、という基準を設け22点選出した（第2表）。対象とする多くの旅日記には、何月何日にどの名所を訪問して何を見たかが記されている。中には、その場所で購入したものや食べたもの、宿代、案内人を雇った値段などが記されているものもある。

これらの小型案内記と旅日記の分析手順は以下のとおりである。まず、分析対象である小型案内記に掲載されている名所と、旅日記で旅人が訪問している名所とを抜き出して集計・地図化し、共通して掲載・訪問されている名所を明らかにした。また、両者を比較し、小型案内記が実際の観光行動においてどのように位置付けられるのかを考察した。

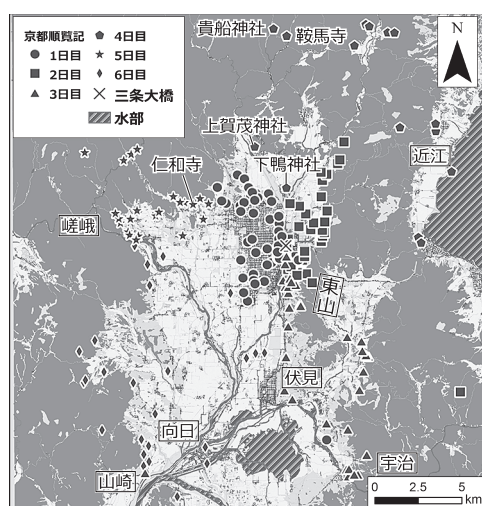
III. 名所の掲載と旅人の観光行動

1. 小型案内記に掲載されている名所

名所の掲載方法としては、『京城勝覧』『京内まわり』『京案内道しるべ』『京都順覧記』が日割ごとのモデルコースを設定している一方、『都名所道案内』『京名所独案内』は方角別に分けた掲載方法をとっている（第1表）。『都名所車』は、名所を分類することなく羅列



第1図 『都名所道案内』



第2図 『京都順覧記』

する形式である。『京城勝覧』では、洛中の名所が日割コースに組み込まれておらず、別に項目が立てられて掲載されている。また『京内まわり』では、コースに組み入れることができなかった有名な寺社や神社が別掲載されている¹⁷⁾。

まずは、小型案内記に名所がどのように掲載されているのかについてみていきたい。分析対象となる小型案内記は第1表に示したとおりであるが、ここでは具体例として既往研究で検討されていない『都名所道案内』『京都順覧記』『京名所独案内』を取り上げる。

『都名所道案内』は、安永9(1780)年に出版された(第1図)。編著者は君修、版元は正本屋吉兵衛となっている。これは、日割コースではなく6区分の方角別に名所を掲載している。洛中が最初に掲載されており、御所の紹介から始まる。それから次に東山、西山(嵯峨)と続き、宇治や山科は後ろの方に掲載されている。

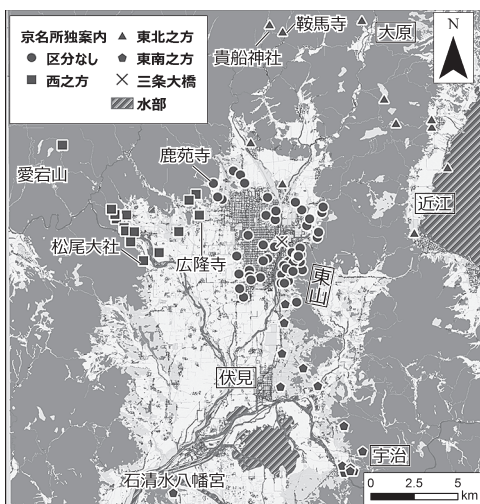
次に、天保2(1831)年に出版された『京都順覧記』¹⁸⁾である(第2図)。編著者は池

田東籬亭、版元は竹原好兵衛である。この案内記では、6日間の日割コースが組まれている。御所から開始する1日目は、洛中の名所が網羅的に掲載されている。2日目は三条大橋周辺から始まり、詩仙堂などの洛外北東部から清水寺周辺までを掲載している。3日目は四条大橋周辺から始まり、東山の南部から伏見・宇治までが掲載されている。4日目は近江・鞍馬・貴船と上賀茂・下鴨神社が組み込まれている。5日目は広隆寺から始まって主に嵯峨の名所と、仁和寺周辺が掲載されている。そして6日目は、梅宮大社から始まり向日や山崎など南西の遠方に位置する名所が掲載されている。

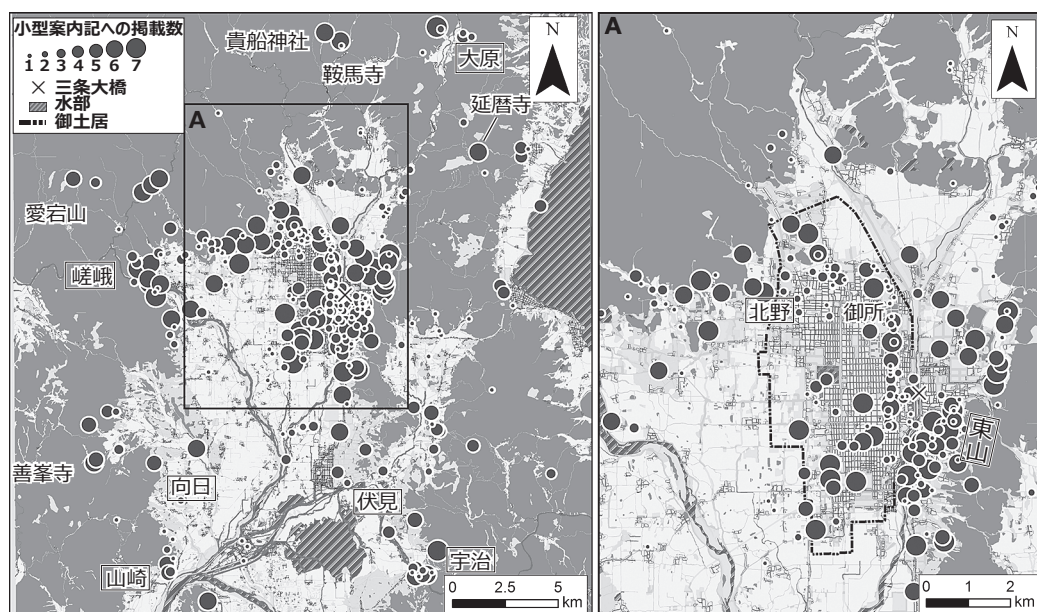
最後に、天保12(1841)年に出版された『京名所独案内』¹⁹⁾である(第3図)。編著者は、『京都順覧記』と同じ池田東籬亭、版元は正本屋吉兵衛である。この案内記は4区分の方角別で名所が掲載されている。最初は御所から始まり、東山と洛中の名所を網羅的に掲載している。ここには洛中の北部にある大徳寺や洛外の鹿苑寺、平野神社なども含まれている。次に「西之方」の名所として、広隆寺から梅宮大社・松尾大社を經由して嵯峨の名所や愛宕山、仁和寺周辺が掲載されている。その次は「東北之方」の名所であり、そこには近江・大原・鞍馬・貴船などが含まれている。そして最後に、「東南之方」の名所として伏見や宇治、石清水八幡宮までの名所が掲載されている。

このように、小型案内記によってコースの設定や掲載の方法にさまざまな違いがみられるが、共通しているのは洛中・東山の名所が優先的に掲載され、遠方の名所は後にまわされていることである。

また、第4図には、7点の小型案内記に掲



第3図 『京名所独案内』



第4図 小型案内記への名所の掲載数

載された名所をすべて集計したものを示した。これをみると、近江・山科・宇治などを含む広範囲の名所が小型案内記に共通して掲載されていることがわかる。中でも特に掲載数が多いのは、東山の名所である。また、洛中の南部にある名所も掲載数が多い。これらに関しては、他の小型案内記を検討した既往研究でも同様のことが指摘されており²⁰⁾、小型案内記が作成される際に洛中と東山の名所が観光行動の中心として設定されたことは間違いないと考えられる。

2. 旅人の観光行動

次に、いくつかの旅日記を例として実際の観光行動をみてみたい。まずは、寛文4(1665)年の『所歴日記』²¹⁾である(第5図)。これは、国学者である石出常軒によって書かれた日記で、3月24日に京都に着き、樵木町に宿をとった。26日から観光を始め、「先に近きあたりを」と東山の名所を訪問している。翌日は、北野を経由して嵯峨の名所をめぐっ

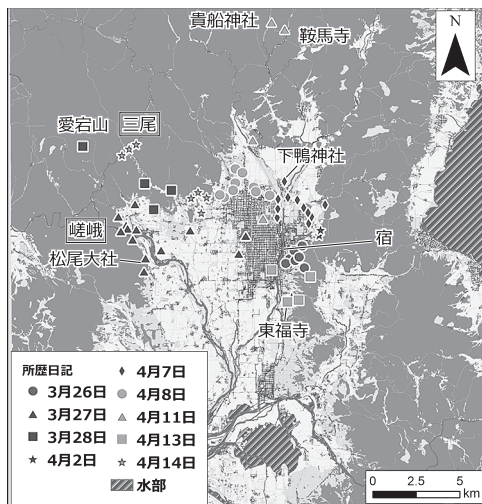
ている。開帳を行っていた清涼寺のほかに二尊院や戸難瀬の滝などを見たあと、松尾大社の方から壬生寺へ寄って帰宿している。翌28日は愛宕山へ登り、4月2日は下鴨神社とその周辺をめぐっている。7日には、吉田神社などの東山北部と、洛中東部の名所をめぐっている。8日には大徳寺などの洛中北部にある名所と北野天満宮などを訪れている。11日は、鞍馬寺とその道中の名所を訪問し、13日には東福寺とその周辺の名所をめぐっている。14日には神護寺・高山寺・西明寺を訪れているが、神護寺では寺の由来や清滝川を望んだ景色、紅葉の名所であること、地藏院のかわらけ投げについて詳細な記述があるのに対し、他の2ヶ所に関する記述は簡単なものであった。「三尾」と称されるなかでも、神護寺が名所としては際立っていたことがわかる。

次に、文政6(1823)年の『伊勢参宮旅日記』²²⁾である(第6図)。作者名はわから

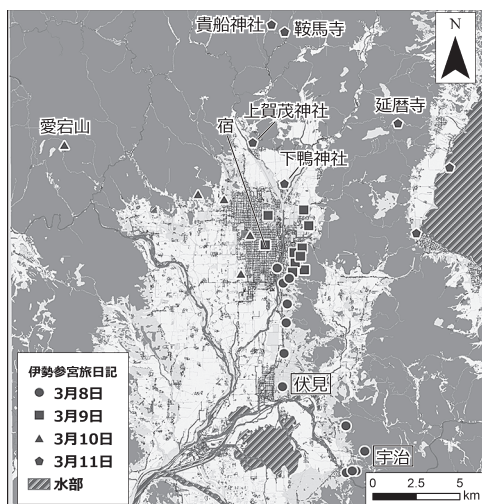
ないが農民であり、石巻からの伊勢参宮の帰りに京都を訪れている。3月8日に宇治の名所をめぐるから伏見へ行き、伏見稻荷や三十三間堂などを訪れたあと、六角堂の前にある「縫物屋嘉兵衛」に宿をとっている。この宿は『京羽二重』にも「順礼宿」として掲載されており²³⁾、宿代は167文だったと記録されている。翌日は、「宿より地走」の案内人つきで、東山を中心に観光を行った。は

じめに六角堂を訪れたあと、御所で36文の守札、300文の守錦を購入している。翌10日は、土産物を買うことに専念しており団扇や糸などを買い求めている。11日には北野方面に足を伸ばし、島原を見物してから愛宕山登山を行っている。その翌日には比叡山を抜けて大津に向かうが、その途中で上賀茂・下鴨神社や鞍馬寺・貴船神社へ立ち寄っている。この日記では、「委しくは京都名所記に見得たり」、「委しく名所記ニ有」など、日記を読む際に何かしらの案内記を参照することを前提とした記述がみられる。

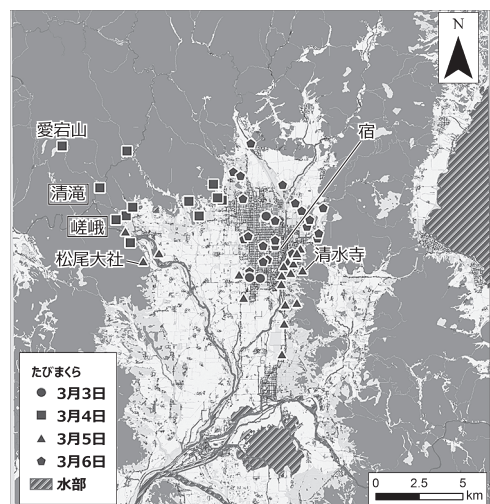
最後に、天保10(1839)年の『たびまくら』²⁴⁾である(第7図)。これは、主家の養子取りの使いに同行した武士である木内啓胤によって書かれた日記である。3月2日に大坂から京都へ入り、3日は東・西本願寺の御晨朝へ参詣したのち、御所での鶏合を見物に出かけている。この日は他に名所を訪れることはなく、三条にある「茶久」に宿をとる。この「茶久」は京都の中でも「人品不良の者は泊めず」²⁵⁾という格式の高い宿とされている。



第5図 『所歴日記』の観光行動



第6図 『伊勢参宮旅日記』の観光行動



第7図 『たびまくら』の観光行動

た。啓胤が本格的に観光を開始するのは4日からで、この日は案内人を雇って北野を訪れている。滞在日数が短いこともあってか精力的な観光行動をとっており、嵯峨の名所をいくつか訪問したあとに雨中の愛宕山登山を敢行している。下山後は清滝の旅籠に宿泊し、翌5日は嵯峨から松尾大社・桂の渡しを經由して、東福寺など東山の南部から、清水寺など東山中部にかけての名所を訪問している。6日も案内人を雇い、本國寺や因幡堂などの洛中の南部の名所から始まり、本能寺など洛中の東部を訪れ、大徳寺のある洛北に行き、上賀茂・下鴨神社、吉田神社など名所を網羅的に訪れている。翌日には帰路につかねばならず、「余日なき故宇治・伏見の方見残せり。其外くらま・貴船へも不参」と悔しがっている。

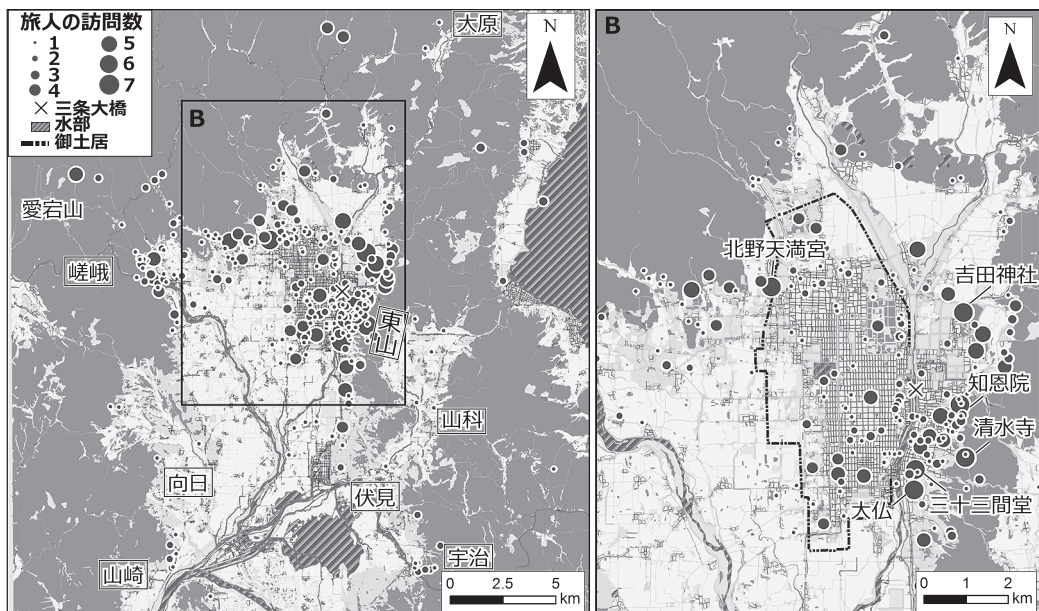
第5図～第7図をみると、いずれの旅人もそれぞれの観光行動の中で、東山の名所を訪れている割合の高いことがわかる。また、洛

中や遠方の名所を訪れていることは少ないが、鞍馬寺や愛宕山には訪問していることも特徴的である。

IV. 観光行動における小型案内記の位置付け

前章ではいくつかの小型案内記に掲載される名所と旅日記からみる実際の観光行動をみてきたが、小型案内記と観光行動の比較を行うことによって、当時のガイドブックであった小型案内記の位置付けを確認したい。

先述したように、小型案内記に掲載される名所は広範囲にわたっている(第4図)。一方、第8図は、分析対象となるすべての旅日記で旅人が訪問した名所を集計し、地図化したものである。例示した3点の旅日記の中で旅人らは頻繁に東山の名所を訪れていたが、これをみても訪問数の多い名所が東山に集中していたことがわかる。また、三条大橋から遠



第8図 旅人の名所への訪問数

方に位置する名所にはあまり訪れない傾向がみられるが、愛宕山や鞍馬寺への訪問数は比較的多い。また、洛中の名所についても訪問数が少なく、東山の名所の中でも訪問数が多い名所と少ない名所があることから、名所の取捨選択が行われていることがわかる。訪問数が多い名所を順にあげると、知恩院、大仏（方広寺）、清水寺、三十三間堂、北野天満宮、吉田神社となり、これらは北野天満宮を除けばいずれも鴨川以東にある名所であった。

両者を比較してみると、小型案内記は実用に即しているとされているものの、実際の観光行動との間にはずれが生じており、小型案内記に共通して掲載されているからといって多くの旅人が訪問していたわけではないということがわかる。このような小型案内記

と観光行動との間でずれが生じている名所を示したものが第3表である。旅人の訪問数が多い順に並べられているため、上位にある場所は小型案内記と観光行動との間にずれがなく、そこは当時、「名所」として共通の認識があった場所だといえる。反対に、下位にある場所は小型案内記には掲載されているものの訪問数が少なく、旅人の間では「名所」とされていなかったか、何らかの都合で訪問することが難しかったと考えられる場所である。訪問数が少ない場所のうち、野宮神社は嵯峨、松尾大社・梅宮大社は洛中からみて南西部に位置している。三室戸寺は宇治、寂光院は大原の寺であり、これらはいずれも洛中から遠方に位置しているために宿からのアクセスが悪く、あまり訪問されなかったのではないかと考えられる。そのような遠方

第3表 小型案内記に掲載された名所への旅人の訪問数

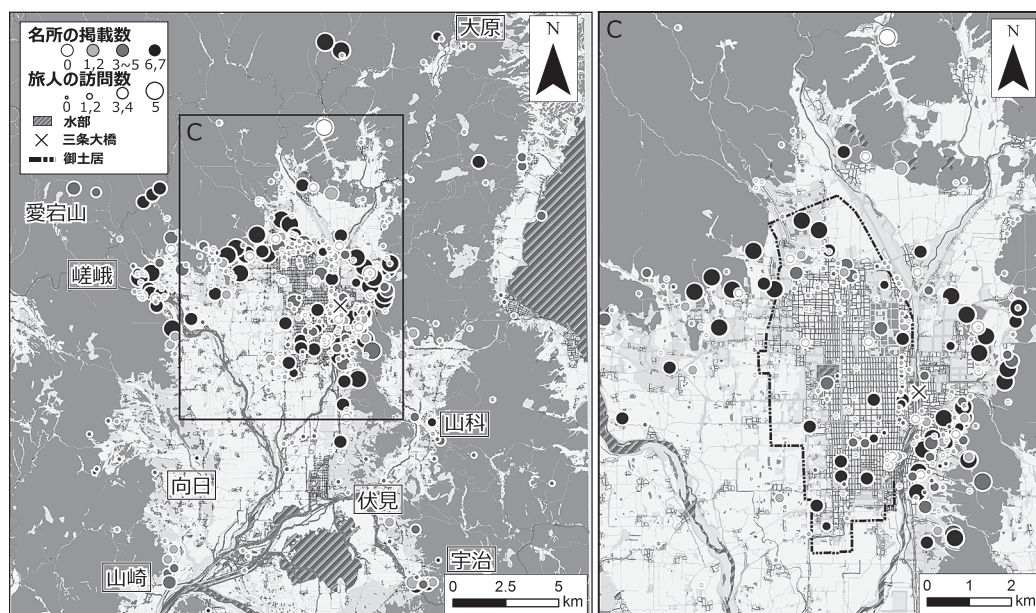
名所	訪問数	名所	訪問数	名所	訪問数
大仏	20	六角堂	13	二尊院	8
知恩院	20	伏見稲荷	13	誓願寺	8
清水寺	19	法観寺	12	東大谷	8
三十三間堂	19	御所	11	西大谷	8
北野天満宮	18	鹿苑寺	11	比叡山	8
吉田神社	18	貴船神社	11	広隆寺	8
祇園社	17	上賀茂神社	11	壬生寺	7
黒谷	17	大徳寺	10	長楽寺	7
仁和寺	17	妙心寺	10	法然院	7
真如堂	16	銀閣寺	10	野宮神社	7
下鴨神社	15	龍安寺	10	因幡堂	7
東福寺	14	法輪寺	10	革堂	6
東本願寺	14	東寺	10	松尾大社	6
西本願寺	14	今宮神社	10	梅宮大社	5
知恩寺	14	平野神社	10	誠心院	5
清涼寺	14	藤森神社	10	相国寺	4
愛宕山	13	高台寺	9	三室戸寺	4
建仁寺	13	天龍寺	9	仏光寺	3
六波羅蜜寺	13	本國寺	9	寂光院	2
南禅寺	13	双林寺	9		
永観堂	13	泉涌寺	8		

にある名所の中で、愛宕山や清涼寺には半数以上の旅人が訪れている。愛宕山は、『たびまくら』の作者のように、多少無理のあるように見える行程でもルートに組み込まれていた。嵯峨の清涼寺は、『所歴日記』の例からもわかるように開帳が盛んな寺であり²⁶⁾、それが旅人を集める要因になったのではないかと考えられる。また御所は、小型案内記で巡覧の起点とされており、観光名所となっていたことが指摘されている²⁷⁾。実際に旅日記をみても、『伊勢参宮旅日記』では御所で土産物を購入した事例が、『たびまくら』では御所での行事を見物に出かけた例がみられる。

一方、小型案内記に掲載がないのに旅人が訪問している名所はいくつかみられるが、いずれも訪問数は少なかった。このことから、多くの旅人が訪問する主な名所は、小型案内記にも共通して掲載されていたという点が指摘できる。

小型案内記への掲載数が多いにも関わらず旅人が訪れていないというずれが生じる原因は、小型案内記が名所をある程度網羅的に掲載する性格を持っていたからだと考えられる。これは、『京内まゐり』の中に掲載されつつも、「見物所なし」と書かれる名所があることからわかる²⁸⁾。しかし反対に、旅人の訪問数が多い名所は、小型案内記に共通して掲載されていた。つまり、旅人は、小型案内記に掲載された名所の中から名所を選択して観光行動をとっていたといえる。

最後に、小型案内記が出版される以前の観光行動についてみておきたい。第9図は、小型案内記出版以前に京都を訪れた5人の旅人の訪問した名所と、その名所が後年小型案内記に掲載されているかを示したものである。図から、5人の旅人が全員訪れた場所は、後に名所として小型案内記に共通して掲載されていることがわかる。つまり、小型案内記が出版される以前に京都の観光行動のひな



第9図 小型案内記出版以前の訪問名所数

形はある程度定着しており、旅人たちも訪れるべき名所をすでに認識していたことがわかる。このような近世初期に京都を訪れた旅人の中には、小型案内記の『京城勝覧』を記した貝原益軒のような学者も含まれており、近世初期の観光行動が後世へ受け継がれていくにあたって、小型案内記がその一端を担ったものと考えられる。小型案内記は観光行動を決定する要因にはなり得ず、旅人に訪問すべき名所の選択肢を提示する役割を持っていたといえる。

V. おわりに

本研究では、近世京都における観光行動を明らかにするために、案内記だけではなく、案内記と旅日記とを合わせた検討が必要であるという既往研究の課題に対し、実用に即していたとされる小型案内記と旅日記の比較分析を行うことで、近世京都における旅人の観光行動と小型案内記の位置付けについて検討してきた。

その結果、小型案内記は実際に旅人が訪問しているよりもはるかに多い名所を掲載しており、実際の観光行動とはずれが生じていることを明らかにすることができた。また、近世京都において観光行動の中心となっていた東山の中でも、旅人が名所の取舍選択を行っていたことがわかった。小型案内記と旅日記の間でずれが生じているのは洛中から遠方に位置する名所が多く、旅人が名所を選択する際に名所へのアクセスのよさが関係していたことを窺わせる。また、遠方にあるにも関わらず多くの旅人が訪れている名所は、旅人にとって優先度の高い名所だったと考えられる。小型案内記は旅人に名所に対す

る共通認識を与えたものといえるが、観光行動の際に名所を選択する要因にはなり得ず、旅人に名所の選択肢を提示するものであったといえるだろう。

京都における主な名所は、小型案内記が出版される以前の近世初期にすでに訪問されていることから、この時点で京都の名所がある程度確立していたものと考えられる。また、旅人の訪れている名所は現在でも人気のある場所であり、近世にはすでに京都観光のひな形が形成されていたといえるだろう。

今後は、小型案内記と旅日記の内容をあわせて検討することで、近世京都における観光の実態をより正確に把握することができるものと考えられる。また、小型案内記以外の案内記や地誌などもあわせて検討し、京都の名所が規定された要因や、旅人の観光行動の根底にあるものを明らかにしていく必要があるだろう。

〔付記〕本研究の地図の背景図は、国際日本文化研究センター・山田奨治教授が作成した「2万分1正式図」のベクタデータを利用して作成しました。記してお礼申し上げます。

また、本稿をまとめるにあたり、ご指導頂きました片平博文先生をはじめとする立命館大学地理学教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

本稿は2013年度に提出した立命館大学大学院文学研究科地理学専修の修士論文の一部を修正したものである。

注

- 1) ①矢守一彦「名所図会とその周辺」、(矢守一彦編著『古地図と風景』、筑摩書房、1984、所収)、69-88頁、②山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書—「京都もの」を中心に—」、地理学報34、1999、95-106頁。
- 2) 菅井聡子「近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識」、日本建築学会計画系論文集579、2004、163-170頁。
- 3) 塚本章宏「近世京都の名所案内記に描かれた

- 場の空間的分布とその歴史の変遷」、GIS—理論と応用 14-2、2006、113-124 頁。
- 4) ①長谷川奨悟『『都名所図会』にみる 18 世紀京都の名所空間とその表象』、人文地理 62-4、2010、60-77 頁、②長谷川奨悟「近世上方における名所と風景—秋里藤島編『都名所図会』『撰津名所図会』を中心に—」、人文地理 64-1、2012、19-40 頁。
- 5) 高橋陽一「多様化する近世の旅—道中記にみる東北人の上方旅行—」、歴史 97、2001、105-133 頁。
- 6) 廣瀬優也「旅日記からみた近世の京都参観」、愛大史学—日本史・アジア史・地理学—16、2007、29-56 頁。
- 7) 齊藤智美「旅先に対する情報の蓄積と認識の変化の考察—近世の江戸と京都を事例として—」、旅の文化研究所研究報告 15、2006、81-93 頁。
- 8) 金 延恩「近世案内記における観光モデルコースの登場—貝原益軒『京城勝覧』から見えるもの」、日本研究 41、2010、73-102 頁。
- 9) 中島伸吾「近世初期の京都見物について—仮名草子の分析を中心に—」、佛教大学大学院紀要文学研究科篇 42、2014、137-150 頁。
- 10) ここでいう旅とは、信仰をメインとした旅と、観光をメインとした旅の両方を指す。
- 11) 新城常三著『庶民と旅の歴史』、日本放送出版協会、1971、3-212 頁。
- 12) 鎌田道隆「近世京都の観光都市化論」、(鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』、思文閣出版、1996、所収)、255-273 頁。
- 13) 前掲 1) ②。
- 14) 前掲 1) ②。
- 15) 前掲 8)。
- 16) 今井金吾解説『旅行用心集』、八坂書房、1972、64 頁。
- 17) 前掲 1) ② 363 頁。
- 18) 古典籍総合データベース <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html> 2014 年 4 月 3 日閲覧。
- 19) 京都地誌データベース <http://www.dh-jac.net/db1/books/kyofu/index.html> 2014 年 4 月 3 日閲覧。
- 20) 前掲 1) ①および 2)。
- 21) 駒 敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記 1』、法蔵館、1992、14-35 頁。
- 22) 石巻市編さん委員会編『石巻の歴史 9』、石巻市、1990、524-559 頁。
- 23) 新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 2』、臨川書店、1970、237 頁。
- 24) 駒 敏郎・村井康彦・森谷尅久編『史料京都見聞記 3』、法蔵館、1992、192-222 頁。
- 25) 宇佐美英機校訂『近世風俗志(守貞謾稿) 1』、岩波書店、1996、218 頁。
- 26) 比留間 尚「回向院の開帳」、(比留間 尚『江戸の開帳』、吉川弘文館、1980、所収)、55-63 頁。
- 27) 前掲 2)。
- 28) 旧真如堂、若王子神社、安養寺、長楽寺、双林寺、高台寺、七観音院、興正寺、智積院、養源院、妙法院、今熊野、泉涌寺、金閣寺などがこれに該当する。